

坪内逍遙

『マクベス評釈』の緒言

『マクベス評釈』の緒言

シエークスピヤが脚本と称せられたるうち、確かに彼れが作と定まれるもの、およそ三十六篇に余れり。一千五百八十八年（作者二十四歳の時）より一千六百十三年までの作なり。作者は一千五百六十四年に生まれて、同六百十六年に五十二歳にてみまかりぬれば、絶筆は四十八九歳の時なりしならん。すなはちシエークスピヤが著作の時期は、およそ二十五年なり。それを、彼が作に現はれたる伎倆、結構、着想等の異同を元として大別すれば、

四期となる。第一期は彼れが修行期ともいふべき時にて、
 即ち諷刺諧謔を主としたる喜劇と、「ロミオ・エンド・
 ジュリエット」の悲劇とを作りし時代なり。第二期は史
 劇と快活なる喜劇とを作りし時代、第三期は深刻なる悲
 劇と表おもては快活にして裏は嚴酷なる喜劇とを作りし時代、
 而してしか第四期は沈静嚴肅にして、しかも優美爽快なる悲
 喜混交の劇を作りし時代なり。シエークスピヤの著作は
 此の四期に於ていちじるし著き異同あり。着想の優劣はいふま
 でもなく、伎倆、結構にも著き差違あり。此の故に、シ
 エークスピヤを知らんとせば、すくな尠くとも、此の四期に

就きて、おのおの一二篇づつは読まざるを得ず。例へば、第一期の代表としては、彼れが処女作とみづから称せし「ギーナス・エンド・アドーニス」といふ叙事の詩、兼ねては「ロミオ・エンド・ジュリエット」など、第二期の代表としては「キング・ジョン」、「ヘンリー四世」、「リチャード三世」など。並に「マルチャント・オブ・エニス」など。第三期の代表には、所謂四大悲劇「ハムレット」、「マクベス」、「リレーヤ」、「オセロー」など。第四期の代表には「テムペスト」、「ウインター・テール」など。但し、是れは只予が卑見によりて選りいで

たるのみ。選択は人々の見る所によりて異なるべし。

シエークスピヤ研究の方法よりいへば、第一期、第二期と順序を追うて評釈するかた穩当なるべけれど、思ふ由あれば、態わざと第三期の作よりはじむべし。其の故は、第一期の作には、語呂、口合等多ければ解釈すればとて、英語を知らぬ人には、到底会得せらるまじき故なり。而して此の註釈は英語を知らぬ人にも、多少の参考になれかしとてするなれば、予が本意にたがへり。さて又第二期の作も、喜劇を置きていへば、英国史に疎うとき人には、興味甚だ深からず。且かつは歴史上の管々くだくだしき註釈を加へ

んもうるさし。しかのみならず加之、伎倆も、着想も、第三期の

劣りたり。所詮、本釈の主旨は、シェークスピアの本体のあらましを、あまね普く邦人に知らせんといふにあれば、先づ傑すぐれたるを取るかた至当なるべしとて、終つひに四大悲劇の随一なる「マクベス」劇をえらぶこととしたり。

或ひは大体を知らせんとならば、管々しき註釈よりは、しんみつ縝密嚴正なる翻譯を掲ぐるかた優れりといふ人もあるべけれど、そは予の如きせんさい謏才不文のもの企及すべきことにあらず。此の故に、予は主に原文の字句を追うて、意義を解釈することに力つとめ、必ずしも詞美を伝へんとせざ

るべし。読者もし真にシェークスピアの詞美を知らんとせば、原文に直接して会得せよ。予は只、語義を明かにするのみをもて甘んずべし。

評釈といふにも二法ありて、有りの儘に字義、語格等を評釈して、修辞上に及ぶも一法なり。作者の本意もしくは作に見えたる理想を發揮して、批判評論するも評釈なるべし。予はじめは「マクベス」を義訳して、専ら第二の評釈の法を取らばやと思ひたりしが、又感ずることありて、むしろ第一義の評釈のかたを取るべしと決しぬ。其の故如何いかにといふに、第二義の評釈、即ち「インタープ

リテーション」は若し見識高き人に成れる時は、読みて頗る感深く、益もあるべけれど、識卑き人の手に成れる時は徒らに猫を解釈して虎の如くに言ひ做し、迂闊なる読者をして、あらぬ誤解に陥らしむる恐れあり。こはシェークスピアの作の甚だ自然に似たるより生ずることなり。此の点は大切の事なれば、いはでもの論に似たれど、左に少しく弁じ置くべし。

予がシェークスピアの作を甚だ自然に似たりといふは、彼れが描ける事件、人物が、實際のと同じにはあらず。彼れが作は読む者の心々にて、如何やうにも解釈

せらることの酷はなはだ造化に肖にたるをいふなり。人々試みに自然といふものを観よ。心を虚平にして観れば、自然は只、自然にして、善悪のいづれにも偏かたよりたりとは見えぬ。固もとより意地わるき継母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。然るに、数奇失意の人は造化を怨み、自然を憤りて、此の世を穢ゑ土どと罵り、苦界そしと非そしるなり。さて又得意の人は、之れに反して、造化を情深き慈母のやうに思ひて、此の世を樂園とも思へり。畢竟、人々の思なひ倣なし次第にて、苦とも楽とも見らるるが自然の本相なり。此の故に、造化の作用を解釈するに、彼の宿命教

の旨をもてするも解し得べく、又耶蘇教の旨をもてするも解し得べし。其の他、老、莊、揚、墨、儒、仏、若しくは古今東西の哲学が思ひ思ひの見解も、之れを造化にあてはめて強あながちに当たたらざるにあらず。否、造化といふものは、是等無数の解釈を悉ことごとく容れても余りあるなり。まことばうに茫として際なき造化の法相なりと評すべし。祇園精舎の鐘の声、浮屠ふと氏は聞きて寂滅み為樂らくの響なりといへれど、待宵まつよひには情人が何と聞くらん。沙羅双樹の花の色、厭世の目には諸行無常の形とも見ゆらんが、愁うれひを知らぬ乙女は、如何さまに眺むらん。要するに、造化

の本意は人未だ之れを得知らず。唯々己に愁ひの心ありて秋の哀れを知り、前に其心楽しくして春の花鳥はなとりを楽しと見るのみ。造化の本体は無心なるべし。さてシェークスピヤの傑作は、頗る此の造化に似たり。上は審美の見識に富みたる学者より、下は一知半解の者までも、彼の作をもてはやすは、一つは故人が激賞したるを伝へききて、雷同附加するにも因よるならめど、一つは、彼の作、度量甚だ広くして、能く衆嗜好しかうを容るること、猶ほ自然の風光の万人を娯たのしましむるが如きに原もとづくならん。バイロン、スヰフトなどの作の、或人に喜ばれて、他の人に

嫌はるるとは、大いなる相違なり。否、ただ衆嗜好を容るるばかりかは。彼れが傑作は殆ど万般の理想をも容れて余りあるに似たり。是れ最も造化の本性に似たる所なり。彼れが作に關しての先輩の評論、解釈、今は百を以て算^{かぞ}ふべし、而も其の見解はおのおの多少相背^{はいち}馳し、甚だしきに至りては（ハムレットの人物論の如き）、柄^{ぜいさく}鑿相容れざるものあり。蓋し造化の捕捉して解釈しがたきが如く、彼が作の変幻窮^{きはま}りなくして一定の形なく、思ひ倣し次第にて、黒白紫黄、いかさまにも解せらるるが故なるべし。此の故にジョンソン、コールリツヂ以来、

シエークスピアの作を評して自然の二字を用ひざりし者は稀れなり。予嘗てかつドラマの本体を底知らぬ湖にたと喩へしことありしが、近ごろダウデン氏の論文を見れば、シエークスピアとゲーテとを大洋に比したるがあり。趣きはやや異なれども同じことわり理ことわりに帰着すべしと信ぜらる。所註、シエークスピアは、たとへ仮令カーライルが評せし如く、一意「地球座」の劇場へ看者を牽ひかんとて筆を執りきとするも、其の看者を牽くの手段、自然詩人の本領にかな合ひて、俗文士が阿世の手段とは異なりたりしならん。或ひは彼れは、衆人心を娛しません為には直ちに、人間の本相を

描破するに如かずと冥識し、必ずしも一時に媚びず、天稟^{てんぴん}
 の詩眼によく人間を觀破し、不偏公平の筆をもて、自然
 の有りのままを描きたりしならんか。案ずるにシエーク
 スピヤは我が近松門左衛門の大いなるものか。指頭大の
 明玉と拳大の明玉、二者の差は度にありて質にはあらざ
 らん。たとひ其の質にも差等ありとするも、双^{ふた}つながら
 自然の寶石にして、人間の作為せしものにあらざらん。
 自然の寶石なればこそ、能く自然の靈光を放ちて、野人
 をも駭^{おどろ}かし、婦女子をも駭かし、卞和^{べんくわ}をも駭かすべけ
 れ、しかしながら、之れをもてあがめて城にも代ふべし

と価あたいひづけたるは、人間の好事、贅沢がしたことにて、元をただせば徒ただの奇石なり。色々に値上げするは人間の好尚が嵩かうじてのわざなれば、或意味にていはば、買ひ冠かぶりなること勿論なるべし。更に喩へて言へば、シェークスピアの作は無心無情の鏡の如し。其の作には何人の面おもても映るなり。明かにいへば、如何なる読者の理想も其の影を其の中に見出だすことを得べし。されば、ゲルギーサスも、其の理想をシェークスピアの作中に発見し、ウルリーチーも、其の理想を同じ作中に発見し、バックニルも、モートルトンも、ハドスンも、ダウデンも、各々我

が影をかしこに見いだし、シエークスピアばかり高尚な理想を詩中に描けるは絶えて無し、とめでくつがへりて驚歎するなれ。げにや、シエークスピアは空前絶後の大詩人ならん。其の造化に似て際涯さいがい無く、其の大洋に似て広く深く、其の底知らぬ湖の如く、普あまねく衆理想を容るる所は、まことに空前絶後なるべし。しかしながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざるが故にあらぬか。これのみの理由によりて理想高大なりといふは信うけがたし。予ひそかに此の点を疑ひ、嘗かつて近松の世話物を取りて、をさをさ先輩の批評法に倣ならひて、分析解剖を試みし

に「天の網島」、「油地獄」さては「恋飛脚」、「伊達染手綱」など、いづれも予が小理想を包容して余れる所尚なほ綽しやくしやく々たり。当年の予が解によれば、「天の網島」の理想は、「ロミオ・エンド・ジュリエット」と兄弟の間にありて、更に可笑をかしき「油の地獄」の解は、ほとほと或理想家が釈したる「テムペスト」の理想をも凌しのがんとせり。勿論、こは理想の上のみの解なり。美術家としての伎倆の上には、其のころの予とても、二者を同じさまには見ざりしなり。これによりて案ずるに、近松もしエリザベス時代に生れて、英文にて世話物を書き残し、ニ

コラス・ロー出でて、それが伝を調べ、ジョンスン・ポー
 プいでて、それが作を再版し、解釈し、称讚し、コールリ
 ッヂ、ハズリットいでて、批判し、激賞し、マロン、ワ
 ーバートンらいでて評註し、近松研究会成りて、称讚し、
 アボット、シュミットらいでて、文典、字彙じいを作り、レ
 ッシング、ゲイテいでて、更に尊く、仏に、独に、米に、
 魯に、近松をもてはやすもの増加するに至りなば、たと
 ひシェークスピアに及ばずとするも、是等多人数の功力くりき
 にても我が国の浄瑠璃作者にて終らんよりは、はるかに
 まさりたる位置に上りつらんかし。其の故は、近松の世

話物も、シエークスピヤの作に似て、頗る自然に肖にたればなり。斯くいへばとて、シエークスピヤを貶して、淨瑠璃作者の亜流なりといふにはあらず。彼れが作は平凡の石ならずといふにあらず。非凡の宝石たることは争ふ可からざる事実なれども、只々其の値段附けは、人々の心々なれば、古人の理解を聞きて正に其の通りと思ふがその愚かなるをいふのみ。若もしシエークスピヤを称美せんとせば、其の人間の性情を活動せしむる伎倆を賞するは固もとより可よかるべく、其の比喻の妙、其の想像の妙、其の着想の妙、これをほめて空前といふも可よく、絶後とい

ふも可かるべし、唯々其の理想をほめて、大哲学の如く高しといふは信うげ難し。むしろ其の没理想なるをたたふべきのみ。然るに、有と無とは二にして一ならざればにや、古人多くは没理想の作を、やがて大理想と解釈して、其の作者を神の如く、聖人の如く、また至人の如く評したるものあれど、没理想必ずしも大理想なるにはあらず、小理想もまた没理想と見ゆることあり。嬰兒の慾の極めて小なる是れ有慾（悪）とも見るべく、無慾（善）とも見るべし。鬼貫がおにつら一句、「なんで秋の来たとも見えず心から」此の十七字、強しひて解釈の辞を作らば、或ひは仏

教を掩おほふべく、或ひは東西哲学の幾体系をも埋むべし。
 木内宗吾が一時の義拳も、若し花々しきマコーレーが筆
 を借りて伝を作らば、ハムデン、ウオシントンの輩のと
 肩を比ぶる義拳ともなりなん。畢竟ずるに、鬼貫ら俳人
 の作には、当人の註釈無く、木内宗吾の義拳には詳伝無
 く、嬰兒の口には言語無きゆるゑ解釈見る者の心次第なり。
 恐らくはシェークスピアと雖いへども、若し散文にて悲劇を
 綴らば、悉ことごとしくいへば、小説の体にて綴りしならば、
 幾段か値段を下ししなるべし。其の叙事の中に、おのが
 理想のあらはるることを避けがたかるべきが故なり。例

へば、「キング・リーヤ」の悲劇は、馬琴の作に似て、
勸懲の旨意ししいといちじるしく見えたれども、作者みづか
らが評論の詞絶えて篇中に無きが故に、見るものの理想
次第にて、強あながち勸懲の作と見倣みなすを要せず。別に解釈
を加ふること自在なり。しかるに、曲亭の作を見れば、
例へば、墓六夫婦の性格の如き、頗る自然に肖にて活動し
たれども、吾人はこれを没理想とは評せずして、勸懲の旨
に成れりといふ。作者が叙事の間に明かに然しかいへればな
り。芭蕉が「古池」の句に、様々の解あるも同理なるべ
く、「源語」の本意をいろいろに臆断するも、同理なる

べし。此の例証尚ほ甚だ不足なれども、没理想の必ずしも大理想にあらざることと、小理想の時としては没理想とも見ゆる由は、之れにてほぼ知らるべし。兎に角に、予は没理想の作を理想をもて評釈することのいといと要なかるべきを信ずるが故に、此のたびの評釈にては、主として打見たる儘の趣きを描写することを力め、我が一料簡れうけんの解釈をば加へざるべし。但し右ただとも左とも見らるる如き場合には、止むを得で故人の評釈をも引用し、予が卑見をも抒のぶることあらん。若し夫れそ全体の解釈は、読者みづから之れをなせ。理想、日本大ならん人は、日

本国を「マクベス」の脚本中に見だすべく、理想、宇宙
大ならんは、宇宙を「マクベス」の中に見出だすべく、
理想乃古だいこに亘わたらんは eternity を「マクベス」の中に見出
だすべし。没理想の詩の無限の興味は実に其の度量の大
洋の如き所にあるなり。

(明治二十四年十月)

日本文学電子図書館

『マクベス評釈』の緒言

著 者：坪内逍遙

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 1

「政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館